

アジアにおける祭礼(祝祭)文化の総合的研究

GENERAL STUDY ON FESTIVE CULTURES IN ASIA

今村 文彦 デザイン学部ビジュアルデザイン学科 教授

杉浦 康平 アジアンデザイン研究所 名誉教授

齊木 崇人 大学院芸術工学研究科 教授

大田 尚作 デザイン学部プロダクトデザイン学科 教授

Fumihiko IMAMURA Department of Visual Design, School of Design, Professor

Kohei SUGIURA Research Institute of Asian Design, Honorary Professor

Takahito SAIKI Graduate School of Arts and Design, Professor

Syosaku OTA Department of Product Design, School of Design, Professor

要旨

本報告は、アジア各地の祭礼に曳きだされる山車の造形とその背後にある祭礼文化をアジア全体の歴史的、文化的流れのなかにとらえようとするものである。2010年4月に開設された神戸芸術工科大学アジアンデザイン研究所は、アジアの山車文化を大きな研究テーマとして取りあげている。

6月には国際シンポジウム「動く山—この世とあの世を結ぶもの」を開催した。日本、中国、シンガポール、タイ、インド、イランから研究者を招き、アジアにおける山車の造形性、精神性、コスモロジーとの関係性などについて発表した。アジア各地の山車の多様な造形を再確認するとともに、その背後にある文化的な共通性、関連性についてのいくつかの重要な知見を得ることができた。

また、インドネシアでの調査を6月から9月まで実施した。バリ島を中心に、寺院祭礼、火葬儀礼等について、その祭礼構造、儀礼の過程について記録した。さらに2011年2月には、中国寧波市前童鎮で元宵節を調査した。鼓亭などの種類、大きさ、運行経路、町の社会組織との関係などについて、情報を収集し、次年度以降の調査につなげた。

これらの成果をもとに、さらに継続的な調査を続け、社会構造、空間構造とも関連づけて、総体的に祭礼と山車を把握していく予定である。

Summary

This report deals with various festival cultures and variety of forms of floats called “dashi” in Japanese which means mountain-like float carried and shouldered on festival, in Asian historical and cultural context. Research Institute of Asian Design (RIAD) established by Kobe Design University at April 2010, took up the cultures of float in Asia as main research theme.

International symposium “Mountain Floats: to Connect This World and Another” was held on June 2010, inviting researchers and designers from Japan, China (Taiwan), Singapore, Thai, India, and Iran. We discussed on cultural meaning of forms of mountain floats, mentalities and cosmology associated with mountain floats in Asia.

In addition, we made researches on temple festivals and cremation ceremonies in Bali, Indonesia and New Year Festival in Ninhai, China.

We continue to research other type of floats in Asia and Japan, make clear not only their symbolic meanings and design languages, but also the relationship of social structure and structure of settlement with ceremonial process.

アジアデザイン研究所の開設

2010年4月、アジアデザイン研究所が開設された。設立の趣旨について、所長に就任した杉浦康平名誉教授は以下のように記している。

中国、インド、韓国、シンガポール、ベトナム、タイ、インドネシアなどのアジアの地域は、大きく変貌しようとしている。……より調和ある未来の建設に役立つかもしれないアジア古来の智慧や、精神性を忘れ去ってよいのだろうか。……とりわけ、「名もなき人びとが日々の生活のなかで造りあげた大自然と共存する豊かなデザイン」、「神と人、人と人を結びつける祭礼のダイナミズム」などに代表される、ぬくもりあるカタチをどのように継承し、生命力にみちた造形語法をどのように発展させ、未来につなげてゆくべきか。

この方針に基づき、研究所は、アジア各地の祭礼の中に登場する多様な山車の造形と祭礼文化の探求を基幹的なテーマに設定し、調査研究を進めることにした。研究所のメンバーとして、杉浦康平、齊木崇人、今村文彦、松本美保子、大田尚作、山之内誠、黄國賓、佐久間華、曾和英子の9名が参加した。

国際シンポジウム「動く山—この世とあの世を結ぶもの」の開催

アジアデザイン研究所の開設記念第1回国際シンポジウムが、6月12日に吉武記念ホールを会場として開催された。アジア各地で今なお盛んに曳きだされる山車は「聖なる山」を模し、「動く山」として祭りの場に神の力を招きよせ、ときに死者の霊を天界に向けて送り出す。活気あふれるアジアの山車文化に多彩な視点から迫り、山車がもつ今日的意義を追求した。以下に、その概略を記す。

(1) 午前部

◎黄国賓 [神戸芸術工科大学大学院助手]

「中国・祭礼の鼓亭、抬閣。竜が運ぶ山車」

中国各地の祭りでは、「抬閣」、「鼓亭」と呼ばれる山車が曳きだされる。「抬閣」は、古い戯曲の登場人物を

演じる子どもたちを長い竿の上に乗せ、それを担いで練り歩く。「鼓亭」は、太鼓を取めた楼閣式の山車である。清代の「天津天后行会図」に描かれている数多くの抬閣、鼓亭、輦車と同じものが、現代中国の寧波市前童鎮の元宵節でも曳きだされる。

鼓亭は、軒層ごとに噴水紋、魚紋、葫蘆(瓢箪)文などで装飾されている。これらの文様は、漢代から伝わる崑崙山思想に深く関係していると思われる。崑崙山は、中国人のさまざまな幻想が託された想像上の宇宙山で、不老不死の神仙世界、死後の霊魂が行きつく場所であった。また、黄河の源流に崑崙山があるとされ、葫蘆形の湖の口から黄河が流れ出ているように描かれた地図もある。

前童鎮の人びとは、鼓亭、抬閣という山車を担ぎ曳き出すことで、此岸と彼岸を結びつけて祖霊と出会い、崑崙山の不老不死の力が常に村の人々を活気づけ、村の繁栄や豊作をもたらすことを願っているのである。◎ナンシー・タケヤマ [シンガポール・南洋理工大学芸術・デザイン・メディア学部教授]

「バリ島の神輿。山と水の象徴性」

インドネシア・バリ島のアグン山の麓にあるブサキ寺院は、バリ島で最も神聖な場所で、母なる寺院といわれる。ブサキ寺院のムラスティ儀礼は、サカ暦に基づく新年を迎えるための祭りで、村をあげて再生、平穏、繁栄を願う祭りをおこなう。神々は天界から下りてくるように求められ、ブサキ寺院を構成する寺院の数を表わす、22台の御輿に鎮座して、みそぎのために近くの川や海に運ばれる。

これらの御輿のデザインは、バリ島の宇宙観、秩序(方位、色彩など)と密接に関連し、造形される。台座に彫られた、1匹の亀と、亀に絡まる2匹の龍(蛇)のモチーフは、龍と亀の授けを得て大海を攪拌し、生命の水(アマリタ)が生じたという、バリ・ヒンドゥーの神話(乳海攪拌神話)にむすびつく。ムラスティ儀礼の御輿は、善と悪とのバランスの上で成り立つ、バリの宗教的世界を表現している。

◎モジュガン・ジャハナラ [イラン・テヘラン芸術大

学テキスタイルデザイン学科主任]

「イラン殉教者を称える生命樹の山車」

イランでは、「ナフル」と呼ばれる独特の形をもつ山車が、聖者の殉死を追悼する祭りに担ぎだされる。イラン東部に、ゾロアスターが植えたといわれるイトスギの木があった。アッパース朝の頃、王の命令でこのイトスギが伐採されたことをきっかけに、当時の人びとの間に聖なる木への追悼の念が高まり、深い嘆きに包まれた、聖なるイトスギの儀式が始まった。この儀式は、殉教したことで永遠の生命をもった英雄の勇武と偉力を称えるためにもおこなわれる。シーア派初代指導者の息子ホセインは戦いで殉死したが、亡くなった記念日には、彼を象徴したナフルが現われ、敬意をもって担がれる。

ナフルは、2枚の直立した平らな大アーチを水平の長い横木でつないでいる。アーチは木製で、いくつかの大きさの網目があり、上部で一体化している。ナフルの形は、イトスギに似ている。ナフルは、永遠の生命やそれに関わる人々を表現するために美しくデザインされている。

(2) 午後の部

◎杉浦康平 [神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所所長、神戸芸術工科大学名誉教授]

「山は動く。聖なるもののダイナミズム」

「山車」は、神を招き、もてなす「巨大な山」の造りもの。人々の背に担われ、車で曳かれる「動く山だ」。一瞬にして出現し、一瞬にして消滅する巨大な山の不思議は、見るものに、神威の顛れを強く実感させる。

アジアでは古代から、神々が降り立つ聖地、仙人が住む桃源郷や祖先霊が集う冥府として「山を敬い」「山を拝む」。多量の浄水を産み出す山は、豊穡の母体として「崇め」られた。山中に出没する妖怪変化に「恐れ」を抱く。天と地を結び聳えたつ山は、「宇宙山」の存在を感じさせる。

アジアの山車の造形、その出現と消滅には、山にまつわる豊かな意味が託されている。人びとは、山頂に

伸びたつ、垂直の木(真柱)を担ぎだし、街中を巡行した。その木は神を招く依り代となり、神輿や山車の原形となる。山車の中心に聳えたつ真柱は、「宇宙樹・生命樹」に見立てられる。

日本の山車をはじめ、インド・中国などのアジアには、遙か古代へと遡る豊かな山車文化がひろがっている。アジアの山車文化の比較研究は、単に「カタチ」の相関に光をあてるだけではない。山車にまつわる「文化的・神話的・象徴的な意味」が浮かびあがる。さらに、アジアの「人間観・自然観・宇宙観のひろがり」をも解き明かすことになる。

◎キルティ・トリヴェディ [インド・ムンバイ工科大学工業デザインセンター教授]

「インド寺院の山車。巡行儀礼が示す宇宙性」

インドでは、重要な祭礼をおこなうときに、寺院のまわりを回る行道が重んじられる。その折に、特別に建造された馬車(山車)に神像を納め、町中を巡行して担ぎ出すという伝統があり、「馬車祭り」と呼ばれる。その起源は非常に古く、3000年以上前にさかのぼる。馬車は寺院と同じくらい重要で、時間的にも構造的にも「宇宙的現象の動的秩序」を表わしている。

インドの寺院は「宇宙の写像」として建造される。それは、インド哲学における神性、崇高な秩序の表現である。静的な形をもつ寺院が石のなかに固定された宇宙の「静的な秩序」を表わすのに対して、馬車は宇宙の「動的な秩序」を表わし、馬車の下半分は宇宙を移動するための車輪にあたる。

馬車祭りでは、馬車の台座のうえに、動かない寺院に相当する仮設の天蓋を組み立てることで、宇宙の全体像が完成される。寺院と馬車の形はよく似ており、寺院が馬車としてデザインされた多くの例がある。馬車と寺院は、同じ秩序、同じ現象の異なった表現に過ぎない。

◎ソーン・シマトラン [タイ・シルパコーン大学准教授、同大学アートセンター所長]

「タイ王室の葬儀車。靈魂を天界に運ぶ」

葬儀車とは、タイ国王の遺骸を王棺に納めて運ぶ、

王室専用の輿車で、御大葬の行列に曳きだされる。ラーマ1世が、18世紀末に4台の葬儀車を建造するよう命じたことに始まるといわれ、王家の古い伝統として今日まで継承されてきた。

葬儀車には、2層か3層の方形の祭壇があり、台座の正面はナーガの頭、後部は尾の形を模す。葬儀車の最下部はナーガを捕えるガルーダの姿がデザインされる。台座には合掌する神々の座像が数多く刻まれる。葬儀車の台座は、宇宙の中心であるメルマー(須弥山)を象徴する。その上の玉座は、メルマーの頂上にある神の住処(天界)を意味している。

ヒンドゥー教の教義では、タイ国王は天界から降下したヴィシュヌ神の化身とされ、国王は不滅の生命をもつ神として、崩御の後に神の住処へと回帰することになる。葬儀車は、メルマー(須弥山)および天界(神の住処)への信仰に基づいて建造され、神としての国王を天界に送り届けるという象徴的意味が込められている。

(3)ディスカッション

「アジアのかたち、デザインの可能性」

最後におこなわれたディスカッションでは、アジアの山車の造形がもつ神話性、文化性や自然観、精神性などが検討された。以下に、その要点を記す。

- ・山車の造形は多様であるが、共通性が見られる。そこにはアジアの世界を包み込む、共通した精神的な基盤があるようだ。
- ・新たな表現に向かうためには、インスピレーションが必要で、その背後には神話的な力が横たわっている。アジアの神話から学ぶことは多い。
- ・自然観、精神的基盤、宇宙観などは、地域ごとの違いがあるが、1つの体系としてとらえられる。
- ・インドやタイの山車の造形は、まるで一粒の種が空中に浮いているかのように見える。その形は、私たちが縛りつけている物理的な、外に広がる目に見える世界での造形ではなく、私たちの心の中に広がる目に見えない世界の造形物のように見える。
- ・目を開いてみる外の世界だけではなく、人間には目

を閉じて心を静めたときのフローティングの感覚、この世界のユニークさ、重要さに目覚めた造形がありうる。

海外調査の実施

(1)インドネシアのバリ島の祭礼の調査を実施した(2010年6月~9月)。東南アジア諸国の祝祭文化について、その実態を把握し、比較検討をおこなうことにより、アジア全体の祝祭文化についての視野を得ることを目的とした。バリ島では、火葬儀礼、寺院祭礼(オダラン)などを参与観察し、ビデオ撮影した。その結果、概略的ではあるが、以下のような知見を得た。

- ・バリ島の宗教的世界は、ヒンドゥー教を中心として土着の信仰や仏教などが複雑に混交しているが、祭礼や儀礼などの宗教的実践としての側面が強調され、祭礼に用いられる造形物、おびたしい供物、舞踊、ドラマなどのなかに表現される。
- ・祭礼や儀礼の構成要素として行列が多用される。寺院祭礼でも寺院のなかを巡回したり、周辺地域を巡回したりする。火葬儀礼でも同様である。
- ・祝祭がつくりだす集団の高揚感、沸騰的状况はそれほど顕著ではなく、儀礼の場では多くの人たちが集団的にトランスに陥る。

(2)中国浙江省寧波市前童鎮の元宵節についても予備的な現地調査を実施した(2011年2月)。現地で実際の元宵節を参与観察、資料収集をおこなった。前童鎮の地域構成、鼓亭の種類、大きさ等の基本情報、巡行経路等を確認した。

これらの成果をもとに、さらに継続的な調査を続け、社会構造、空間構造とも関連づけて、総体的に祭礼と山車を把握していく。

その他の共同執筆者

松本 美保子 名誉教授/山之内 誠 デザイン学部
環境・建築デザイン学科 准教授/黄 國賓 大学院芸術工学研究科 助手